

共に創る図書館

～館長対談シリーズ⑦～

苛原医学部長との対談

吉本 本日は、医学部長で医歯薬学研究部長の苛原先生からお話をお伺いします。よろしくお願ひします。苛原先生のご経歴や研究分野についてご紹介いただけますか。

苛原 私は美馬市出身ですが、子供の頃は吉野川対岸の貞光町まで泳いで渡ったり、橋桁から飛び込んだりして、夏の間はいつも真っ黒でした。中学から徳島市内の徳島大学教育学部附属中学校へ移り、城南高校、徳島大学へと通いました。実家が商売をしていたこともあり、最初は別の学部へ行っていました。

その後医学部を目指すことになりました。当時は大学闘争の最中で大学院進学を拒否する動きもあった時代でしたが、私の場合は先輩からの勧めもあって、もうそのような時代ではないということで大学院へ進みました。

大学院へ入った時は産婦人科第5代目教授の足立春雄教授が香川医科大学の創設準備室長就任のため教授不在になっていた時でしたので、研究室では昼間忙しい先輩に合わせて、夜10時頃から朝の3時頃まで自由な雰囲気の研究していました。その時の研究は、妊娠した時に分泌されるhCGに対するラジオイムノアッセイの開発でしたが、その後大学院3年の時に、着任された森崇英教授の勧めにより、母親が胎児をどうして異物として認識しないのかとの観点でHLA抗原の研究をすることになりました。HLA抗原についての知識を得るために、骨髄移植で有名な東京大学医科学研究所の臓器移植科へ2か月ほど行き、HLAのタイピングなどを習いました。その後1年ほど抗血清を用いて卵子表面のHLAのタイプを検討する研究を続けましたが、難しかったのを記憶しています。最終的には、抗リンパ球抗体のラジオイムノアッセイの開発とその臨床応用に関する研究で学位を頂きました。

医科系の免疫研究部へ移った後は腫瘍免疫の研究を行うことになりましたが、このように知らない分野のことを調べるために図書館へ行って文献を調べ、さらにその文献の参考文献を辿り、コピーをたくさん集めたものです。

その後、青野敏博教授の下で間脳下垂体の研究をお手伝いすることになりましたが、当時、米国メリーランド大学に内分泌分野で世界的に有名な先生がいましたので、1年間留学させていただき、卵巣での排卵メカニズムの研究を行いました。

「日本初の倫理委員会」を徳島大学に設置

吉本 徳島大学では当時、体外受精実施の準備が進められ、その際、倫理委員会を全国に先駆けて設置されたね。

苛原 当時は国内のどこの大学にも倫理委員会というのはありませんでした。徳島大学では当時の産婦人科の森崇英教授が外国の様子を見て来られて、これは「神の領域」であり、今まで全く考えられていなかったことを行うわけですから倫理的な配慮が必要だということで、病院長であった麻醉科の齋藤隆雄先生、医学部長であった小児科の宮尾益英先生と一緒に、日本で初めて徳島大学の中に倫理委員会を設置しました。倫理委員会は10名ほどの委員で構成されますが、委員会への全員出席が条件となり、議事も全員の承認が必要となりますので非常に厳格なものです。

吉本 体外受精に関しては東北大学が先行した形になりましたが、徳島大学ではこのような議論がなされた上での実施でしたので、慎重にスタートされましたね。



苛原 スタートの面は日本初とはなりませんでしたが、徳島大学に日本で初めて倫理委員会を設置し、合意された上で開始したということは結果として非常に良かったことだと思います。

今の学生にとって図書館は「勉強する場所」

吉本 図書館についての思い出はいかがですか。蔵本分館は医学部の学生も非常によく利用されています。

苛原 こちらの図書館もよく利用させていただきましたが、留学していた時にはメリーランド大学の図書館で毎日1時間くらい文献を探したりしました。

医学部長を拝命してから学生の様子を見る機会が多くなりましたが、今の学生が勉強する場所は家ではないようで、図書館を「勉強部屋」として使っていて少し驚きました。医学部の中にもまだ十分とは言えないかもしれませんが、国家試験等の勉強できるスペースを作るよう努力しています。



医学部長 苛原 稔

吉本 それは高校生でも同じで、塾や予備校の自習室などで午後10時や11時頃まで勉強して、家へ帰ったら勉強しないという習慣が身についている場合がありますので、このようなことが影響しているのかもしれないね。

苛原 今の学生を見ると本当にそう思いますね。図書館は「本を読む場所」というより「勉強する場所」として使われているという感じです。これが良いことか悪いことかは別にして、まずは国家試験に合格してもらわないといけませんし、勉強方法がそういう時代であるならそれに合わせないといけないと思います。そういう面でも図書館にも色々と援助していただいていると思います。また、このような状況の中でも「本に親しむ」ということが育まれたらいいのですが。



附属図書館長 吉本 勝彦

吉本 蔵本分館では、医学部の学生を含めて休日の朝8時半の開館から夜12時までずっと勉強している学生も多くいますが、本に親しむというのとは少し異なりますね。ただ、学内に自習の場所が足りないので、図書館を自習の場として使っていただくのもいいと思います。

医学教育の世界基準

吉本 医学部の教育における状況はいかがでしょうか。医学科で大きな課題は「国際基準に対応した医学教育認証制度」ということでしょうか。

苛原 医学科の国際認証という点では国内の全ての医学教育機関における共通の課題です。国際基準に沿った医学科のカリキュラムを通して卒業した「世界基準の医師」を育てることが将来必要になります。また医科栄養学科については、医学部の中にある管理栄養士養成機関というのは徳島大学が国内唯一ですので、病院や介護の場などで活躍できるような特徴を持った栄養士を育てること、また研究においてもそのような点を中心に取り組んでいます。保健学科については、通常の資格に加えてさらにレベルの高い専門性を持った、例えばがんに関する専門看護師のような高度な専門性を、修士課程や博士課程で学んでいただけるようにしたいと考えています。

医学部の研究環境

吉本 研究環境についてはいかがでしょうか。特に医学部の先生方は病院での診療もあり、なかなか研究のための時間が取れないということをよく聞きますが。

苛原 臨床系は特に最近では収益を上げないといけないと言われておりまして、どうしても「臨床に、臨床に」と

なり皆さん疲弊した状態ですので、実は医学系の論文数はピーク時から比べると半減しております。また基礎系では息の長い研究ができるような資金的余裕がありませんので、本来の自由な発想で自由な研究をすることができなくなっています。先日もちょうどノーベル賞を受賞された大隅先生が同じことをおっしゃっていましたが、やはり基礎研究は長いスパンで行える環境が必要だと思えます。しかし現実には短期間で結果を出さざるを得ない状況ですので、手っ取り早いとなると、「薬の開発」となっています。

吉本 そうですね。本当に必要な基礎研究ができない状況になっていますね。

苛原 日本の医学系の研究費は、元々公的資金が半分、製薬会社等からの寄附金が半分というところが多いのですが、アメリカでは8割くらいが公的資金でしかもそれが日本の10倍くらいもあります。日本はアメリカの10分の1の公的研究費で、しかも企業等からの外部資金も6割くらいに減少していますので、研究環境は悪化しています。また来年春には個人情報保護法が改正される予定ですので病歴も全て個人情報保護法に関わってきます。このため同意書の問題とかさまざまな問題が出てきますので、さらにハードルが高くなってきます。これからはそういう面でも工夫しながらやっていかないといけなくなります。

吉本 以前だと基礎系講座に臨床系講座から研究指導を依頼された大学院生もいましたが、今は基礎系も含めて医学科卒業生の大学院への進学者が少ないのが全国的な傾向ですね。

苛原 今は医師は2年間の初期研修が義務付けられていますので、その間は臨床漬けです。したがって初期研修終了後は学位が欲しいという人は別にして、どちらかというところ「学位」を取るというよりは「専門医」を取りたいということになります。しかし徳島大学の場合は、旧酵素研を含めて基礎研究組織が大きいので、良いチャンスがいっぱい転がっていると感ずります。

医学部の地域連携・社会連携、グローバル化

吉本 地域貢献とか社会連携の状況についてはいかがでしょうか。

苛原 医学部としては医学科、医科栄養学科、保健学科ともに、病院を中心とした地域貢献を行っています。徳島県の中では大学病院の位置付けは大きなものです。

吉本 海外との交流についてはいかがでしょうか。

苛原 他の学部も同じだと思いますが、グローバル化のために、外から受け入れることと併せて、どんどん外へ出て行って活躍できる方も育てたいと考えています。海外からはモンゴルから来られる方も多く、医学部では学生の短期留学も促進しておりまして、アメリカのテキサス州立大学MDアンダーソンがんセンターやドイツのハノーバー大学などへも毎年留学生を送り出しています。



電子ジャーナル問題

吉本 電子ジャーナルのことはいかがでしょうか。研究大学として現状のパッケージを維持することが望ましいのですが、どの大学でも厳しい状況です。

苛原 電子ジャーナル経費の問題は、全国の医学部長会議等でも話題になることがありますが、これといった方法は見当たらないのが現実です。出版社も資本主義ですので利益を追求するので寡占化されています。私自身も日本発の英文誌の発行に関わっている立場からしますと、学会のみの力ではインパクトファクターも付かないし、流通にもなりませんのでやはりそのような出版社に頼まないと仕方がないということになります。何か手立てを打たないと近い将来、本すら読めない時代になることが予想されます。

吉本 情報格差といいますか、大きな大学に比べてやはり小さな大学では余計に読めない環境になる恐れがあり

ます。アマゾンなどは5%の利益率ですがエルゼビアは35%の利益率だそうです。このように出版社が寡占化し、電子ジャーナルが高騰化しても研究者としては投稿せざるを得ない状況ですし、これは世界的な問題ですね。

また徳島大学ではオープンアクセスを推進していますが、このような動きが国内的、世界的にまとまったものになれば学術雑誌の高騰化に対する利用者側からの圧力の一つにもなると考えられます。

図書館は「考えさせる場」であってほしい

吉本 図書館へ期待することはいかがでしょうか。図書館では2年前から学習支援を中心に行う方針を決めて、学生のために色々と実施しており、例えば文献検索や文献管理などの講習会なども実施しています。

苛原 どの大学においても昔から図書館というのは学部の次の位置付けとして重きを置かれてきました。図書館の必要性というのは今も変わりませんが、どのようなサービスをしていくかという点では年々変わってきていますので、そういう面で私たちを支援していただきたいと思います。医学科では3年生の研究室配属の際のオリエンテーションにおいて、30分程度図書館からも文献検索等について説明していただいておりますが、その際に、将来、医師、栄養士又は看護師等として「文献を自分で探す能力」を身に付けておくということが大切だと思います。

もうひとつはぜひ「本を読む」という習慣を身に付けてほしいと思います。日本語の本を読んできっちりとその内容を理解する、それを報告書やレポートに書くということが必要です。

吉本 最近では大学生の「書く力」も問題になっていますので、レポートの書き方、論文の書き方というようなアカデミックライティングについて演習も含めてきちんとやっていかないといけないと感じていますし、ライティングセンターのようなものが必要だと思います。アカデミックライティング指導が東北大学や早稲田大学などのように学部の単位となっているところもあります。図書館だけでは実施できませんが教員の協力などがあれば可能だと思いますので、目標の一つにしています。

苛原 そういうものが必要ですね。ぜひ図書館長のお力をいただいて医歯薬学全体の医療教育開発センターと一緒に取り組んでいただきたいと思います。本をいかに読んでいただくか、本からいかに色々なものを得ていただくか、自分で文献を探して論文を書けるようになるかということですが、外国では大学院の学生はそういう訓練を行っていて身に付いているわけですね。ところがこちらではそこまで至っていませんので、ぜひ図書館でも場所とか指導とかにおいて支援していただけるといいですね。またこのような技能を大学院の単位とするのも良いと思いますし、その中でねつ造等の研究不正に対する研究倫理教育も図る必要があります。

それから活字も大事ですがその他に、医療に関係した映画などの映像ライブラリーの充実もできるといいですね。倫理的なものなど、医療者として考えないといけないようなこと等を本で読むのと共に映像でも見て吸収していただきたいと思いますし、バックグラウンドをしっかりと作ってあげたいと思います。

吉本 歯学部においてもやはり、医療倫理に関しては、まずは「生と死」という問題を1年生の頃から考えさせる機会を持たせることが大切だと感じています。

苛原 図書館はそういうことを「考えさせる場」であると思います。

それから図書館は建物としても「大学の象徴」としてほしいと思います。蔵本キャンパスが大学としてふさわしいキャンパスとなるよう、旧外来棟が撤去された後は、教員や学生が集えるような場所を作っていただき、図書館がその中でシンボルとなり、学生にとって記憶に残るような建物にしていただきたいと思います。

吉本 今後とも連携して取り組みたいと思います。本日はありがとうございました。

